

その国は天にあった。今は誰一人いない、
全てに忘れ去られた暗い場所であつても。

「全く……私は仕事だと言っているのに」
ある空に浮かぶ島に急遽連れ込まれるという、
常識では考え難い事態に、その白青の真直ぐ
長い髪で、薄青い目を持つ一見女は、自身を
連れて来た青年を不機嫌そうに見た。

「そもそも貴方が私に押しつけた仕事です。
今更何の用ですか、魔に堕ちた悪しき主よ」
「仕方ないじゃん？ 水の精霊は今はお前に
持たせてるんだから、回復魔法必要な時には
いないと困るし」

がちりと体を下衣のある和装で固める相手に、
青を限りなく濃くした黒の短く硬質な髪と、
鋭い蒼の目を持つ、洒落た身なりの青年は、
あくどくも見える顔付きで楽しげに笑う。

「でも調子良さそうじゃん、リタン。もう、
主が無くとも水の精霊さえいれば、お前達は
その人形の躯体で十分やっていけそーだね」

目前の高度に造られた人形の中身——本来は
召喚獣という、『力』だけが頭在させられた
存在である相手を自律起動させるため、唯一
足りない力を精霊という存在で補われている
相手は、不服さを隠しもせずに青年を睨む。
「貴方にはまだ、水の精霊は必要でしょう。
貴方に今残った精霊は、回復魔法が使える程、
貴方は使いこなせていないのですから」

この召喚獣も精霊も、以前は青年がその身に
宿し、更には青年の母と言える存在にも一時
宿っていた『力』であり。『水』の縁を持つ
その母を基に造られていた青年の躯体は、
『水』と最も相性が良いのは事実だった。

「別にー？ ヒト助けなんて面倒事、これで
最後にしようと思ってるし。そもそもコイツ
回復するのも、必要に迫られてだし」

歪んだ顔で笑いながら、人形内の精霊を使い、
目前に横たわる男……白銀の短い髪の神父の
ような者の、致命傷をあっさり癒した青年に、
人形は大きく溜め息をついていた。

呆れしかないような顔付きをする人形には、至極真つ当な理由があった。

「貴方を今まで利用した魔王一派の重臣を、わざわざ蘇生するのは……今度は貴方が彼を利用するためですか」

「当たり前。せっかく、軀を治せば何度でも蘇れる『魔』なんだし、使える内は使わなきゃ」あまりにあくどい発言に益々不機嫌になる、気高い『力』である相手に、青年は笑う。

「と言っても、今回ばかりは、今までみたく完全蘇生というわけにはいかないけどさ」

「……？」

元々、『魔』という存在には、本質的には死という観念が希薄であり、それというのも、肉体の破壊だけであれば、何かの方法で傷を治すか、相性の合う新たな軀があれば靈魂を遷せば、生を繋げるのが『魔』の特徴だった。

あくまで寿命があればの話だが。

「殺された相手が悪いな。オレもそうだけど、命を直接削ぐような奴に殺されたしねえ」

「……それで貴方の中の吸血鬼が、今はもう目覚められないと言っていましたね」

「そ。『魔』だから寿命は奪われてないけど、魂を直接侵されたってとこかなあ。ルシウの兄ちゃんも、『魔』じゃない部分はごっそり持っついていかれたみたいだね」

何人も『魔』の寿命は奪えないと言われ、代りに『魔』もヒトの寿命を奪う事は出来ず、そのために、『魔』に殺された者が黄泉路に迷うのはわりとよくある事だったが。

逆に殺された『魔』が、たとえ一部でも、殺された相手に何かを奪われる事は、滅多にある事ではないようだった。

「ねー、ルシウの兄ちゃん。起きれそうー？」
つんつんと、しゃがみ込みんで横たわる男をつつく青年の下で。何故か不意に――

「……お？」

突然男の顔立ちが、これまでよりも穏やかなものへ変貌した事に、青年は目を丸くした。

「……」

そして男は、ゆっくり色の無い目を開けると。

「……聞こえてますよ、シア君」

ふっと穏やかに微笑みながら、上半身だけを起こし、辺りを見回していた。

「ここは――黄の祭壇の近くですか」

「当たり前。向こうには『黄輝の宝珠』が、燦然と控えて兄ちゃんを待ってるよ」

しゃがんだまま頬杖をつき、にこにこ男を見る青年に、男は困ったような顔で笑う。

「……レイスウ・キエラとその中の吸血姫は、今はどうしたんですか？」

元々彼らと共に、この天空の島にいた者が、男は気になる様子であり、

「更に違う部屋で、ずっとオレを待ってるよ。黄の石が手に入り次第、レイ姉ちゃんの軀を、ミカランが十分使えるようにするためにね」

「……」

青年の返答に男は、安堵が半分、落胆半分といった様子で、苦笑しながら溜息をついた。

「やはりレイスウ・キエラ自身は——満足に生きられる寿命は残っていないという事ですか」
「そ。ラピちゃんがこの先、何とか大人まで化けられるようになってあげてた命くらいは、戻ってきたみたいだけど」

人間の体を僅かに変貌させる程度の寿命は、強い『魔』の体を長く生かす事は出来ない、青年は淡々と現実を告げる。

「それなら日頃はミカランに躰を使わせれば、体は長持ちはするだろーし？」

「そうですね。それが一番、彼女も吸血姫も、辛うじて残してあげられる道でしょう」

「その代り今後、リアンを守ってもらうけど、ずっとザイ兄ちゃんとこ預けっ放しだし」

青年が男達の仲間にされる際、遠ざけられた青年の仲間の名に、男は納得したように頷き。

やれやれといった感じで立ち上がった。

「それにしても、陽炎サンの事も、ちよつとくらい気にしてあげれば？」

歪んだ顔付きで笑う青年に、男は肩を竦め、

「それは、俺達を使っていた者に任せます。もう十分ジェレス・クエルは、長い間彼女に付き合いましたからね」

「違いないや。見捨て切れない身内って奴程、始末の悪いものもないよねー」

男が男を利用する者達に縛り付けられた因の一つを、知っていた青年の言葉に。少しだけ悲しげに息をつく男だった。

そうして隣室の扉の前に立った青年と男を、不服そうながら黙って見守る人形の前で、
「にしても……」

大人の体躯のまま、顔だけが変わった男に、青年は納得いかなさそうに首を傾げる。

「何でジェレス・クエルが消えた後に、逆にジェレス・クエルの顔を再現出来てるわけ？」

青年の質問に、男は穏やかに青年を見返した。

「違います。これが俺、ルシフージュ本来の姿なんでしょう。それなら顔は元のまま、体だけ成長しているのも頷けますからね」

「……何てーか。ごく悪魔らしい台詞なのに、物凄く矛盾してる気がするの、オレだけ？」

「つて事は、やっぱりジェレス・クエルは、ユーオン君に持つてかれちゃった？」

「ええ、完全に殺されました。もう俺は羽も使えませんし、気分も実に爽快ですよ」

「へ？ とまだ納得いかない風の青年に、男は悪魔とは思えない優しげな顔で微笑む。

「俺はやつと悪魔になれたんです。おかげで今後は、俺の好きなように動けます」

「……何てーか。ごく悪魔らしい台詞なのに、祭壇に続く扉の前に立つたろう男の望みを、男が目覚める前から知っていた青年は、ただ首を傾げるしか出来ず、

「今までの俺はこの躰も乗っ取り切れな程、愚かなお人好しでしたからね」

「乗っ取れば乗っ取ったで、お人好しな事を今からすんの？」

「当たり前です。俺はそう生まれたんです。悪魔はお人好しでいてはいけませんか？」

「実に楽しげな男に、要領を得ない青年だった。」

「……何てーか。ごく悪魔らしい台詞なのに、物凄く矛盾してる気がするの、オレだけ？」

「実に楽しげな男に、要領を得ない青年だった。」

「自分でお人好しだなんて言う奴、フツ―は
そもそもお人好しじゃないけど」

「当たり前です。俺は悪魔ですよ」

「……何でまた、悪魔だけになった時の方が、
素直にお人好しをやったのさ？」

元々その男が、優しさを利用され、長い時間
苦しみを与えられた結果『魔』に堕ちた事を
知る青年に、男は穏やかに笑って答える。

『魔』は己を、咎人などに見なしません。

よって償いのため己の希みを殺しません」

「なら、優しくない方が優しくなれるとか、

難しいこと兄ちゃんは言ってる？」

「俺に関してはその通りです。苦しむが故に
悪魔に利用されていたジェレス・クエルは、
優しいが故にヒトを殺すユーオン君と、多分
虚ろな同類ですよ」

そしてと男は、青年の方をも、憐れむように
苦笑しながら見つめる。

「今の君がまさに、今の俺の同類でしょう。
俺を見捨てる事で、誰かを助ける悪魔の君に」

「……………」

男の言う通り、これから男にその身を滅ぼす
ある事をさせるため、男を目覚めさせた者は、
無表情に男に応じる。

「誰かを助けるのはついでだけど？ オレは

そもそも、オレのためにアンタを利用するし」

「上々ですよ。俺も俺自身のために、宝珠の

封印を解きたいんですから」

扉を開けた先、暗く細い回廊を確認する男は、

「本来の君はそういう方法は嫌いでしょうが、

今の君なら俺の好きにさせてくれるでしょう」

まるで青年を心配するような視線で、回廊に

入る前に青年を振り返っていた。

「陽炎とスリージのように、互いが互いを、

悪魔と思っていたら楽だったでしょうが、

俺とジェレスは悪魔を奪い合っていたんです

……それは本当に、長い徒労でした」

そうして最後に、男は幸せそうな顔で笑い、

灯りのない暗い場所に進む男を、青年は、

別れも告げずに無言で見送ったのだった。

無情に扉を閉め、無言で佇む青年に、全て

黙って見守った人形が、ようやく口を開いた。

「……彼は貴方と、北の四天王と、その娘を

助けたのですか」

「みたいだね。アイツも資格者の一人だから、

犠牲になって封印を解いてくれるんだろ」

あっさり即答する青年に、人形は眉を顰める。

「北の四天王とその娘が、そもそも資格者で

あった理由は……彼は知っているのですか？」

「いや。それは多分、オレ達しか知らないよ」

「……………」

ある古い夢を知っていた人形と、その夢を

伝えられて真実を導き出していた青年は、

「別にーじゃん？ 昔に好きだった相手の、

娘と孫を助けたいってだけでもさ」

遠い昔に、その血を奪われた事のある男の、

血を奪った吸血鬼の娘とされる北の四天王を

思い起こしながら……真実を全て一身に抱え、

やがて青年も一人——暗い道を歩き始める。